

それではまた、逢う日まで(仮)

ノーマン 旅芸人。各地を旅している男。
キャロル 元気で活発な女の子。
カール キャロルの父。農家。妻を無くしている。

冒頭

倒れているノーマン。
通りかかるキャロル。

ノーマン 「すみません…あの…」

キャロル 「うわっ！大丈夫ですか!？」

ノーマン 「助けて下さい…」

キャロル 「えっ、なにかあったんですか？」

ノーマン 「もう、なんにちも、何も食べてないんです…喉もカラカラで…」
キャロル 「食べ物?…うーん、バウムクーヘン食べます?」

ノーマン 「それは多分とどめの一撃になります。」

キャロル 「じゃあ、ビスケット」

ノーマン 「あの」

キャロル 「卵ボーロは?」

ノーマン 「パサパサ界のトップスリーじゃないですか。」

キャロル 「うーん、じゃあガムは?」

ノーマン 「えっと、その、ご飯が食べたいんです。美味しいご飯が食べたいです。」

キャロル 「じゃあ、お父さん呼んでくるから!ここにいてくださいね

!」

ノーマン 「ありがとうございます…」

カール ゆっくり入る

カール 「おお!本当だ!ははは!」

ノーマン 「すみません、ここしばらくなにも食べてなくて。」

カール 「娘から聞いてるよ。しかしど

うしたんだ?こんなところで」

ノーマン 「旅の途中で…お金が…」

カール 「旅?ああ、それギターか?いいなあ!ギター一本で世界中を旅ってか、俺もそういうの、若いうちにやっておくべきだったなあ。そういやね、俺も昔は悪やつたもんだ!夜の町中に繰り出してな、バイクのエンジンが悲鳴を上げるほど」

ノーマン 「あの、その話ながいですか？」

カール 「ん?ながいが?」

ノーマン 「大変自分勝手なのですが、多分聞いている最中に私死んじゃうと思っんです…」

カール 「おお!わるいな!ほれ、これ食いな」

ノーマン 「ありがとうございます!」

カール 「あんた、無一文なのか?」

ノーマン 「恥ずかしながら…」

カール 「うーん。とりあえず、家にきな。行く宛てないんだろ?」

ノーマン 「助かります…」

カール 「あんた、名前はなんて言うんだ?」

ノーマン 「ノーマンです。」

カール 「俺はカールつてんだ。すぐ近くだから、もうすこし頑張ってくれ。」

ノーマン 「はい。」

カール歩き出す

カール 「昔は俺もワルやっててな、道行く男たち全員に一人ずつポケットティッシュを配ってやってたんだ。嫌がる奴には二つ押し付けてやったこともある」

ノーマン それただのバイトですね。あ、すみません、まっってください。」

カール自慢しながらノーマンを拾う

ノーマン 「その話は避けて通れないですね。変な人に拾われてしまった…」

カール「おい！はやくこいよー！」
ノーマン「はあーい」

オープニング。

ノーマン「すみません、すっかりお世話になってしまって。」

カール「礼なら娘にしてやってくれ。俺が通りかかっただけなら無視してたからな。」

ノーマン「ええ…ありがとうございます。」
「えーと」

キャロル「あ、キャロルです。」

ノーマン「キャロルか。助かりました。」

カール「キャロル、もうあっち行っていいぞ。しつかし、なんだってあんなところに行き倒れか？」

キャロル「はい」（はげようとする）。

ノーマン「みたいなもんですね。」

カール「ギターか…。」

ノーマン「はい。これ一本で世界中を旅しているんですが…。」

キャロル「あ、ギターだ！弾けるの？」

ノーマン「もちろん！ただ…。」

カール「なんだ？」

ケースのなかは空っぽ。

カール「空っぽじゃねえか。どうした？盗まれたのか？」

ノーマン「夜おそくに、焚き火の前でギターの練習してたんです。しかし、夜遅いのと疲れも相まって、ついうたた寝してしまいました。気づいたら、僕のギター炭になってまして…。」

キャロル「え？」

ノーマン「燃えちゃったんです…。」

カール「なるほど。それで稼ぐ手段も無くなっちゃったってわけだ。」

キャロルはけるようにカールがジェスチャー

ノーマン「新しいギターをてにいれるにもお金がかかるし、国に帰るにも…一回大通り

で手拍子で稼ごうとしたけど、ダメでした。」
カール「手拍子？」

ノーマン「はい。」（やってみる）。

カール「…もうやめていいよ。」

ノーマン「そういうわけでは…。」
カール「…よしっ、しばらくここにいていいぞ。」

ノーマン「えっ！本当ですか？」

カール「ただし、ただ飯はくわせられないからな。仕事を手伝ってもらおうぞ。給料もはらう。」

ノーマン「はい！がんばります！」

カール「娘にはてをだすんじゃねえぞ！」

ノーマン「心得ております！」

カール「よし、じゃあさっそく明日からだ。今日は最期の休みだ。噛み締めとけよ。」
ノーマン「えっ…。」

暗転

ジェスチャーでしごこの案内。

ノーマン。引き受ける。

ノーマン「む、難しい…。」

しばらく苦戦するノーマン、鼻唄歌いながら作業する。

キャロルがはいってくる。

キャロル「なにしてるの？」

ノーマン「いやね、仕事でよく使う紐の結びかたらしいんだけど、これが全然。スツとやってぎゅっぎゅっ、パッてやるらしいんだけど、もう意味不明」

キャロル「こんな簡単なのに？（やってみせる）。

ノーマン「なん…だと？」

キャロル「さっきの、なに？」

ノーマン「ん？」

キャロル「ふふーって」

ノーマン「はなうた？」

キャロル「それ！」

ノーマン「鼻歌がどーしたの？」

キヤロル 「なんて曲なの?」

ノーマン 「いまのはコスモスって曲だよ。」

キヤロル 「ほかにもしってるの?」

ノーマン 「もしかして…歌をしらないのかい?」

キヤロル 「知ってるけど…いまのは知らなかったから。」

ノーマン 「そっか、結構有名だと思っただけだなあ。君以外と物知らずだね。」

キヤロル 「うるさいな!」

ノーマン 「ああ!ちがうよ?しつかり者の割にはってこと」

キヤロル 「うるさいなあ!」

キヤロル 「あのさ、なんで旅なんかしてるの?」

ノーマン 「うーん、べつに、たいした理由じゃないよ。」

キヤロル 「?」

ノーマン 「むかーしおんなじように旅芸人してる人がいてさ、その人の歌をたまたま聞いたのがきっかけかな。その人の横で演奏できたらなーって。」

キヤロル 「その人って?」

ノーマン 「さあねえ。それが誰かわかんないんだ。ただ、心の隙間に流れ込んでくるような、そんな歌声だった。」

キヤロル 「その歌ってどんな歌?」

ノーマン 「えー、ひ・み・つ!」

キヤロル 「…は?」

カール 「おーい!手が止まってるぞー!今晚飯抜き決定だなー!」

ノーマン 「それだけは!それだけは勘弁を!」

キヤロル 「あーあ、かわいそうに」(はける)

ノーマン 「君の相手をしていたからでしょ!」

カール (入場) 「ほうほう、ただ飯食おうとしてる男はこいつか。」

ノーマン 「いや、あの子が話しかけてきて。」

カール 「はいはい言い訳しない。」

ノーマン 「先生…」

カール 「こんな作業で根をあげてもらっちゃあ困るぞ。まだまだ過酷な仕事は山ほどあるからな。」

もう二度とお前がギターを握れなくなる位、

手に豆つくってもらうぞ。」

ノーマン 「鬼じゃないですか!」

カール 「しつかし珍しいな。」

ノーマン 「なにがです?」

カール 「キヤロルがあんなに人に興味持たないって。」

ノーマン 「そうなんですか?」

カール 「ああ、人見知りだな、酷いときは俺も見知る。」

ノーマン 「それ嫌われてるんじゃない?僕にとってよりは、歌に興味を持ってる感じでしたよ。」

カール 「…歌か…」

ノーマン 「もう興味深々って感じで、僕もギターさえ持つてればいろいろおしえてあげるんですけどねえ。」

カール 「余計な親切!大きなお世話!」

ノーマン 「小さな親切!ですよ。」

カール 「そんなことより仕事だ仕事。いままで男手がなかった分働いてもらうからな。」

ノーマン 「ブラックな所にお世話になってしまった…」

カール ほーら、ついてこい!

ノーマン はい…

二人ともはける。

集合して食後。

ノーマン ぐちそうさまでした。はあーつかれたあ

カール 「明日も早いから早めに休んどけよ。」

ノーマン 「えええええ…」

キヤロル 「ノーマン」

ノーマン 「なんだい?」

キヤロル 「昼の話の続き、聞かせてよ。」

ノーマン 「ん?昼の?」

キヤロル 「ほら、音楽始めたきつかけ。」

ノーマン 「ああ、それね。」

カール 「なんだ面白そうだな。」

ノーマン 「いや、たいした話じゃないですよ。そうですね。あれは…」

カール 「お、語りだしたぞ。」

キヤロル 「語りだしたね。」

ノーマン 「やりにくいなあ…何年くらい前だったかな。当時若かった僕は只年をとっていくのが苦痛だったんです。自分になんの取り柄もないことを悩んでました。そうして、夜の町をさまよっていると、一軒のクラブから歌が聞こえてきたんです。町の雑音を縫って僕に届いたその歌に、惹かれました。」

ノーマン 「入ってみるとそこには、酔った人間が歌を聴きながら、笑ったり、泣いたり…僕は歌が作り出すそんな空間に酔いました。

その人の歌は、僕の肩に乗ったいろんな重りを、一つずつ外してくれました。その時、いつかあの人の隣で一緒に音楽がやりたい、こんな空間を作り出したいって。」

カール 「なんだか感動的だな。」

ノーマン 「その時はギターなんか全く弾けなかったけど、目標ができました。僕は、歌に救われたんです。」

キヤロル 「ねえ、その歌ってなんて歌なの？」

ノーマン 「んー、それはね」

カール 「キヤロル、もう遅いから寝なさい。」

キヤロル 「えーなんで？まだ色々聞きたいのに。」

カール 「子供は寝る時間だ。夜しっかり寝ないとニキビができて、最悪の場合死にます。」

ノーマン 「なんて嘘を…」

キヤロル 「なんで歌の話、しちやいけないの？」

カール 「キヤロル」

キヤロル 「おかあさんの話するときだってそうだし、なにか隠してる？」

カール 「なにも隠してないさ！実はピーマン

が嫌いだったこと以外はね」

キヤロル 「…もう寝るよ」

カール 「いい子だ、おやすみ。」

キヤロル はける

ノーマン 「なんであんな」

カール 「おっと余計な口出しするなよ。好奇心で人の事情に首を突っ込まないことだ、賢く生きる秘訣だよ。」

ノーマン 「でも…」

カール 「お前は居候。わかるな？」

ノーマン 「…はい」

カール 「わかったらおまえも寝る。夜しっかり寝ないとニキビができて最悪の場合死にます」。

ノーマン 「わかりましたよ！」

ノーマン はける

カール、一人のこり、うなだれる。

カール 「キヤロル、すまない…」

暗転

仕事中のノーマン。

ノーマン 「はあ…つかれたなあ…」

ノーマン 「いやあ、昨日は何だか、変な感じだったな。あの親子、何だか…なにかあるのかなあ？」

キヤロル 「あー、サボってる！」

ノーマン 「さ、サボってないよ！休憩してたんだよ！」

キヤロル 「…サボりじゃん。」

ノーマン 「ば、ばれた…あのさ」

キヤロル 「昨日はごめんね。」

ノーマン 「え？」

キヤロル 「ほら、なんか…きを使わせたでしょ？」

ノーマン 「そんな、大丈夫だよ。それにしても…」

キヤロル 「お父さん、歌が嫌いなんだって。」

ノーマン 「そうなの？」

キヤロル 「うん。だから、家で歌うといつも怒られるんだ。」

ノーマン「…」

キヤロル「でもね、なんで嫌いなのか、教えてくれないんだ。」

ノーマン「教えてくれないの?」

キヤロル「うん、いつつ、笑ってごまかすの。」

ノーマン「そうなんだ。」

キヤロル「そういえば、お母さんの話をするときもいつと笑ってごまかしてたなあ。なにか関係あるのかな?」

ノーマン「かな?って聞かれてもなあ…君は、歌が好きななの?」

キヤロル「…うん。」

ノーマン「嫌いって言うのは簡単なのに、好きって言うのはその何倍も勇気がいる。へんな世界だよ。」

キヤロル「歌って何だか、不思議な力がある気がするんだ。」

ノーマン「僕もそうおもうよ。そうだ!君の知ってる歌をおしえてよ!」

キヤロル「え…」

ノーマン「君の好きな歌さ。教えてよ」

キヤロル「でも…」

ノーマン「お願い!」

キヤロル「うーん…」

ノーマン「じゃあ、一生のお願い!」

キヤロル 歌う が、音痴

ノーマン「…あれだね、その、あの、ピカソみたいな歌だね!」

キヤロル ビンタする

ノーマン「いったっ!痛いよ!なにをするのさ!」

キヤロル「笑ったでしょ!」

ノーマン「笑ってなんかないさ!」

キヤロル また歌う

ノーマン「あつはは!いやちがうん」

キヤロル ビンタする

ノーマン「いった、いったいって!」

キヤロル「笑わせたなら誇れ、笑われたなら怒れ!」

ノーマン「なにそれ!?!」

キヤロル「家の家訓!」

ノーマン「血の気の多い家訓だね」

キヤロル「だから嫌だったのに…わたし、音痴だから…」

ノーマン「ごめんってば…そうだ!」

キヤロル「なに?」

ノーマン「僕が歌を教えるよ!」

キヤロル「…ほんと!?!…あつ、でもお父さんが…」

ノーマン「こつそりなら大丈夫さ!」

キヤロル「…そうだね!」

ノーマン「よし、急に上手になって驚かしてやろうか!」

キヤロル「うん!」

ノーマン「その代わりに、これ教えてくれる?」

キヤロル「もちろん!」

ノーマン「そしたら、僕の仕事がおわたら練習をやろう。もちろん内緒だね!」

キヤロル「うん!」

ノーマン「よし、じゃあ早速今日からだ!」

劇中歌

音楽が流れながら二人が成長する。

ノーマンは仕事の上達

キヤロルは歌の上達

ノーマン「いいかい、まずは腹式呼吸だ。大きく息を吸ってえ…お腹にためて…吐き出すんだ!」

キヤロル「あー」(へんな音程に)

ノーマン「ふははははは」

キヤロル「ビンタする。」

キヤロル「まずコツを教えるよ。わつかをま

ずつくって、そこに右手の紐を、」

ノーマン「なん…だどっ!」(失敗)

キヤロル「こればかりは才能かも…」

ノーマン「まって!見捨てないで!」

カール「とりあえず飯を食わせた。話を聞くと色んなバーや、クラブ、時には舞台で歌を歌っていたらしい。」

ノーマン「なんだかすごい親近感。」

カール「しばらくの間、給料払う代わりにここで働いてもらう事にした。お前と違ってあいつは器用だった。」

ノーマン「僕だって最近は…。」

カール「そうしている間に、俺たちは付き合っ始めた。」

ノーマン「ワーオ…。」

カール「その間も、あいつは近くの飲み屋で、自慢の歌を披露してた。透き通るような、心の隙間に入り込んでくるような、そんな歌声だった。」

ノーマン「…それって」

カール「またしばらくすると、俺たちの間に子供ができた。キャロルだ。産まれてすぐにわかった。母親似だつてな。俺に似なくてよかった。」

ノーマン「十分似てますけどね…。」

カール「俺たちは幸せだった。彼女がいて、キャロルがいて、俺がいた。そこにはいつも、彼女の歌があった。」

カール「だが、そんな幸せも長くつづかなかつた。彼女はある日、倒れた。なんの前触れもなく。俺は焦った。病院に駆け込んだ。俺は泣きじゃくっていた。」

ノーマン「涙もろいですよね。」

カール「彼女は医者にみてもらうと、すぐに手術が必要な容態だったらしい。しかし、その手術で、彼女は声を、歌を失うことになった。」

ノーマン「…。」

カール「手術のあと、彼女の体はどんどん衰弱していった。彼女にとって歌はそれほど大事なものだつたんだ。そして最期の瞬間、ベッドの中で、彼女は口を動かした。声は出なかった。でも俺にはわかった。」

カール「ごめんね。彼女は、最期に、そうい

った。」

ノーマン「…。」

カール「彼女は歌が大好きで、俺も彼女の歌が大好きだった。でもそれ以来、俺は歌が怖くなった。そして、キャロルのことも…。」

ノーマン「キャロルも?」

カール「あの子が大きくなるにつれて、顔も、性格すら彼女に似てきた。そして、声も。だからあの子の歌を聴くのが…俺は怖いんだ。」

ノーマン「そんなことが…。」

カール「唯一の救いは、あの子が音痴だったことだな。」

ノーマン「救いじゃあ、ないです…。」

カール「まあ、こんな所だ。さあほら、お前もそろそろ寝とけ。片付けは俺がやとくから。」

ノーマン「でも、あ…いえ、わかりました。おやすみなさい」

カール「くれぐれもキャロルには言うなよ! 男の約束、だろ」

ノーマン「わかってますよ。それでは。」

カール「一人のこり、うなだれる。」

ノーマン、キャロルの言葉が頭に響く。ノーマン「いつまでそうしてるんですか?」

キャロル「どの歌が好きだったの?」

ノーマン「あのままじゃキャロルがかわいそうですよ。」

キャロル「ごまかさなさいよ!」

ノーマン「救いじゃないです」

キャロル「お父さんのバカ!」

? 「ごめんね…。」

カール「…クソッ」

暗転

キャロル一人たたずんでいる。

ノーマン「あつ、いた。もう練習の時間だよ。」

キャロル「…うん。」

ノーマン「昨日の事？」

キャロル「お父さん、なんで話してくれないんだろ。」

ノーマン「…」

キャロル「私やっぱり、歌うのやめるよ。」

ノーマン「そんな！もったいないよ！せっかくだいままで練習してきたのに」

キャロル「でも、多分歌ってもお父さんの事傷つけるだけだから。だから…やめる。」

ノーマン「そんな…あのね、君のお父さんは」

カール「またサボってんのかー？」

ノーマン「サボってないですよ！っていうかもう今日の仕事終わったはずですよ！」

カール「仕事が終わったなら次の仕事をすればいいじゃない」

ノーマン「鬼じゃないですか。」

カール「キャロル、ほら帰ろう」

キャロル「…」

カール「キャロル…ノーマン、まさかお前話したのか？」

ノーマン「いや、話してないですよ！なにも！本当に！」

カール「怪しいなあ…」

ノーマン「本当ですよって！」

キャロル「ノーマンには話したんだ…」

カール「あつ…」

ノーマン「いや、その、キャロル」

キャロル「私には教えてくれないくせに。」

ノーマン「違うんだよキャロル、その…」

カール「お前たちだってこそこそと二人で何してたんだ？」

ノーマン「いや、なにも、怪しいことはしてないですよ！」

カール「仕事が終わったあとでもそそくさと俺に隠れて。何か企んでるんじゃないか？」

ノーマン「えっと…」

キャロル「ノーマンは悪くない！私に歌を教えてくれてただけだよ！」

ノーマン「あつ！キャロル！」

カール「うた？」

キャロル「あつ…」

カール「お前余計なことを…」

ノーマン「えつと、その…」

カール「出ていけ。」

ノーマン「！」

カール「もうこれ以上家と関わらないでくれ。」

キャロル「私が教えてって頼んだの！だから

ノーマンは悪くないよ！悪いのは私！」

カール「いや、大丈夫だよキャロル。お前が悪くない。」

ノーマン「…」

キャロル「そんな、やだよ！ノーマンはただ私に！」

カール「キャロル！」

キャロル「ノーマンは悪くないよ…」

ノーマン「そうだ…僕は悪いことなんかしてない！」

カール「なんだと!？」

ノーマン「あなたは、自分の過去を彼女の未来に重ねて怯えてるんだ。彼女をただ自分の都合のいいように束縛してるだけだ！」

カール「それ以上しゃべるな…」

ノーマン「彼女と向き合うべきですよ！彼女はもう、子供じゃない！」

カール「うるさい、だまってくれ！」

ノーマン「あなたと彼女の間には、歌が必要なんだ！昔のように！」

カール「俺だって、もうどうしていいかわかんねえんだよ!!」

キャロル「お父さん…」

カール「何度も何度もそう考えた！でもその度に、聞こえるはずのないあいつの、ごめんねって声が頭のなかに響くんぞ！あの時のアイツの顔が浮かぶんだよ！」

カール「もう、どうしていいか…わかんなんだよ…」

キャロル「…」

キャロルが歌う。

カール「その歌は…」

キャロル「もう、笑って誤魔化さなくていいよ。悲しいのを隠さなくていい！」

カール「キャロル…」

キャロル「だから、私を、私を頼ってよ！たった一人の…家族なんだから…」

カール「すまなかった。俺は今まで怖かったんだ！お前に、母さんを重ねて、お前まで、失ってしまうんじゃないかって！」

キャロル「大丈夫だよ。私は大丈夫。辛い時はさ、半分こしようよ。そしたら同じだけ辛いし…同じだけ強くなれるから。」

カール「ありがとう…」泣く

キャロル「あーあ、お父さん泣き止むのに結構時間かかるんだから、ノーマン責任とつてよね。」

ノーマン「え、僕が？」

キャロル「ほら、部屋までつれてくの手伝って！」

ノーマン「ああ、うん。」

キャロル「どうかしたの？」

ノーマン「いや…僕が探してたのは、君だったのかも知れないなって」

キャロル「なに気持ち悪い事いつてんの？」

ノーマン「なんでもないよ。さあ、いこう」

カール「ノーマンごめんね！」

ノーマン「泣くと幼児退行するの？この人」

カール「もうしないからね！」

ノーマン「小学生か！」

暗転

朝、別れの時間。

ノーマン「…じゃあ、今まで、お世話になりました。」

カール「おう。正式に雇ってやろうと思った

が、お前は娘に手を出しそうだからな。」

ノーマン「心得ておりますよ。」

キャロル「もうすこしいてもいいのに。」

ノーマン「うん。でも僕、もうひとつ目標ができたから、それまでに修行しとかなきゃ。」

キャロル「もうひとつ？」

ノーマン「うん。」

キャロル「うん。じゃなくて、教えてよ。」

ノーマン「な・い・しよ！」

キャロルビンタする

ノーマン「いったつ、痛いよ！」

キャロル「最後だから強めにいったの。」

ノーマン「いったの。じゃないよ！」

カール「強くなったなあ。キャロル」

ノーマン「普通怒るところですよ。」

キャロル「ノーマン！私も夢、出来たんだ！」

ノーマン「きみの？教えてよ！」

キャロル「秘密！」

ノーマン「ぐっ、やられるとむかつくな…」

キャロル「ノーマン、ギターケース開けて

みて！」

ノーマン「ん？…これは！」

キャロル「紐いっぱいいいれといたから、練習してね」

ノーマン「ああ…ありがとう」

カール「よし、じゃあ行ってこい！」

ノーマン「じゃあ、お世話になりました！

カール「おう。近くにきたら挨拶くらいしろよな。」

ノーマン「はい！」

キャロル「じゃあね！」

ノーマン「じゃあ、元気で」

ノーマンはける

親子、なか良さそうにさる

舞台が空になってから

音声のみで

ノーマン「キャロル、僕の目標はね」

キャロル「ノーマン、私の夢はね」

二人同時に

キャロル「いつかあなたの隣で…」

ノーマン「いつか君の隣で…」

暗転 エンディング